

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

https://www.kwansei.ac.jp/c_rcc/ TEL:0798-54-6019

現代社会に直接かかわる研究センター

RCCセンター長 浅野 淳博

二〇二三―二四年度にキリスト教と文化研究センターのセンター長を拝命した、神学部の浅野淳博と申します。ご存知のとおり、キリスト教と文化研究センターでは、キリスト教の思想と精神がいかに社会に対して建設的に貢献しうるかを模索し、提案し、そして実践することを意図しております。これから二年間は、以下に紹介されている三つの研究プロジェクトを立ち上げて、それらをセンターの中心的な活動とすることになります。

最近の社会状況を見わたすなら、現政権与党は軍備予算を大幅に引き上げて、専守防衛の理念に反する仕方での戦争のできる国家体制を築こうとしています。さらに国連からの改善勧告を無視して、あからさまに難民条約の規定に違

反するような仕方では、入国管理法の改悪案の提出準備をしています。国民と在留外国人の安寧が脅かされる現在の状況に對して、キリスト教がいかにオルタナティブな国の在り方と市民の生き方を提案できるかが、今問われているのだと思います。

そのような中で、今回の三つの研究プロジェクトは、非常に意義深い主題を扱っています。小田部氏がプロジェクト・リーダーを務める「戦争の記憶と想起―平和への警告とその継承」という研究プロジェクトは、戦争の脅威とその根本にある悪を記憶に留め、記憶が薄れる世代においていかに継承するかを模索します。戦争体験のない為政者らが安易に戦争を口にしつつ、「平和主義から軍国主義へ」(Time

Magazine 二〇二三年五月)へと舵取りをする現代において、戦後日本が戦争の絶対悪を根拠として永久の戦争放棄を憲法に刻み込んだという事実が忘れられ、歪められないために、本プロジェクトは意義深いものです。

さらに浅野がプロジェクト・リーダーを務める「ユダヤ人もギリシア人も―越境する聖書理解を求めて」という研究プロジェクトは、現代にも続くユダヤ教とユダヤ人に対する差別意識を、原始教会発生当時の理念とは裏腹に宗教母体であるユダヤ教から離脱して「キリスト教」が誕生した状況とリンクさせて、ローマ帝国の拡大主義と連動する仕方ではいかにその差別意識が醸成されたかを確認します。これはユダヤ人に限らず、あらゆる人種差別に對して、キリスト教の聖典がいかに否を突きつけることができるかを考察することを目的としています。ちなみに人種やジェンダーを根拠としたヘイトスピーチが溢れ、異質な他

者を受容して多様性溢れる社会を創造する市民の試みを為政者らが拒み阻み続ける今日において、この研究プロジェクトは意義深いものとなることでしょう。

そして「キリスト教主義教育の可能性と実践」という研究プロジェクトは、社会に関わり奉仕するキリスト教の精神が教育活動をおしていか

に継承されるかという問題について、「マスタリー・フォー・サービス」という本学のスクールモットーがいかに表現されているかを手がかりとして、見極めるという意味において非常に意義深い試みです。

これら三つの研究プロジェクトを柱とした今後二年間のキリスト教と文化研究センターにおける活動が、本学の教育活動のみならず運営全般においてキリスト教の思想と精神が深化する一助となることを心から願います。上の研究プロジェクトの趣旨に沿った講演会等も予定されており、随時お知らせをする予定であります。皆様のご参加を心からお待ちしております。

■ 研究プロジェクト紹介

■ 研究プロジェクト

戦争の記憶と想起——平和への警告とその継承

世界の各地では、今なお紛争や戦争が絶えません。どのような理由からであれ、戦争はその暴力により人間とその社会、さらには自然環境にも甚大な被害と悲惨な結果をもたらします。したがって、かけがえない命に満ちたこの世界がそれに相応しく生きられるために、私たちは戦争を起こさないための努力、平和を創り出すための努力を絶えず必要とします。「戦争の記憶と想起」は、そのために必要な知恵と勇気を私たちに与えてくれるでしょうか。

一九八五年に当時のドイツのヴァイツゼッカー大統領が終戦から四〇周年の演説で、「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となりま

す」と語ったことはよく知られています。この演説の中で、ヴァイツゼッカー大統領は、出エジプト記の荒れ野の四〇年に言及し、四〇年を迎える時期が責任ある立場の世代交代とそれに並行して心に刻んできたことが忘却されることに注意を向けています。この演説から四〇年後の二〇二五年に、日本は終戦から八〇周年を迎え、第二次世界大戦の記憶を当事者として語れる人々はますます少なくなり、新たな世代交代の時を迎えようとしています。

本研究会は、このような時代状況の中で、今一度「戦争の記憶と想起」の主題について、キリスト教的な視点から、国内外の事例を通して、歴史

的、理論的、実践的に考察し、次の世代へ何をどのように継承していくことができるのか、その将来的ビジョンについて探ることを目指します。

戦争の記憶は、記念日のセ

レモニー、記念日の公式な語りや当事者の証言、記念碑（警告碑）、ミュージアムの展示等、様々なメディア（媒体）を通じて想起され、継承されていきます。また、そこには加害者の視点と被害者の視点をめぐる問題も含まれます。これらの問題は、戦争の記憶と想起の多様性を認め、対話的な想起が必要であることを認識させます。本研究会では、キリスト教主義学校の平和教育において、どのような記憶がいかなる仕方で想起され、継承されてきたかについても着目します。本研究会は、公開研究会や公開講演会を開催し、RCCが戦争の記憶を継承し、平和の構築に参与する一つの拠点となることを目指します。

（報告者 主任研究員 小田部進二）

■ 研究プロジェクト

ユダヤ人もギリシア人も——越境する聖書理解を求めて

本研究の目的は、（一）長いあいだキリスト教の歴史を支配してきたユダヤ教に対する偏見とそれに付随する差別的思考の構造を、とくに教会の開始当時から後二世紀に焦点を置いて繙き、（二）ホロコーストへの反省から動機をえて本格的に始まった新約聖書解釈の新たな動き——いわゆる「パウロに関する新たな視点」——が何であり、この解釈のムーブメントが現代の聖書学とキリスト教にいかなる影響を与えているかを確かめることです。この研究をおして、キリスト教会がユダヤ人に対するのみならずすべての人種差別を放棄して、あらゆる差別に抗う試みに寄与することが期待されています。

本研究は、イエスの時代のユダヤ教を再構築する試みである、E・P・サンダース著『パウロとパレスチナ・ユダヤ教』

（一九七七年出版）の成果に依拠しています。この著書は、ユダヤ教が行為義認の形骸化した宗教であり、信仰義認を説くキリスト教がこれを淘汰した」という、ユダヤ教とキリスト教の関係性に関する理解が、テクストの証拠を欠くまったくの誤解であることを証明しました。しかしこのような誤解は今でも教会のみならず、中学・高等学校の歴史や宗教教育において再生産され続けています。そしてこれが、特定の宗教と民族に対する偏見を持続させ増長させる結果に繋がっています。本研究では、原始教会が開始して、それが個別のキリスト教という宗教へと展開する最初の二世紀におけるユダヤ教と教会との関係性を明らかにし、それが実際にどのような仕方でもユダヤ教とユダヤ民族に対する差別意識を継承したかを確認します。その上で、

この偏見の上に成り立った既述の誤解が、現代の新約聖書解釈学においていかに解消されつつあるか、今後いかにして解消され続けなければならないかについて分析をします。

本研究の構成員は、上述のサンダースの著書を翻訳中の浅野（神学部）、二世紀の反ユダヤ主義者マルキオンの研究者（ハルナック著『マルキオン』

二〇二三年翻訳）である津田謙治氏（京都大学）、本研究主題と関わる『ユダヤ人も異邦人もなく』（二〇二三年）を刊行した山口希生氏（日本同盟

基督教団中原キリスト教会牧師・東京基督教大学）、またルカ文書における教会とユダヤ教との関係を研究する木原桂二氏（商学部）からなります。（報告者センター長浅野淳博）

■研究プロジェクト キリスト教主義教育の可能性と実践

このプロジェクトは、キリスト教主義のもとに実践されている教育における可能性や実践について、幅広い分野から探究することを目的としています。世界が急速に変化する現代、わたしたち自身の価値観もまた大きく問われています。そのなかで、学生、生徒、児童たちは何に出会い、何を考え、何を感じているのでしょうか。このひとりひとりに対して、キリスト教主義学校に

しかできないことは何なのでしょうか。このような問いのもとに、学生や子どもたちに向き合う働きをしておられる実践家ないし研究者を講師としてお招きし、複数回の講演会を持つことを予定しています。なお、これと並行して、関西学院におけるキリスト教教育の確認と検討に結びつけるべく、『建学の精神考』発行に向けての準備をおこないます。（報告者センター副長梶原直美）

キャンパスの中のキリスト教シンボル（16）

今回は、商学部チャペルの講壇の背後に掲げられているバナー（写真参照）を紹介させていただきます。

このバナーは二〇〇九年頃（正確な時期は不明です）、当時、商学部のリチャード・J・ステインソン宣教師を派遣して下さったアメリカの合同メソジスト教会の信徒グループの寄贈によるものです。

最初に、バナー中央に記されている言葉について説明しましょう。“Thy Will Be Done”はマタイによる福音書十六章一〇節後半の欽定訳（一六一一年）の一部で、新しい日本語訳では「御心が行われますように」（協会

共同訳）と訳されています。これは、イエス・キリストが語られた「山上の説教」（マタイ五―七章）の中にある、通称「主の祈り」（六・九―一三）の一節です。

この祈りの言葉に続いて「天におけるように地の上にも」と添えられており、天の神様の思い（Thy Will）が、わたしたち人間の世界においても実現するように（Be Done）との願いが込められています。つまり、人が生きる地上の世界には神の御心である愛が必要であると理解できます。

その上で、この祈りの言葉を囲むようにして描かれている



「茨の冠」の意味について考えてみましょう。マタイによる福音書は、重い病や貧困、差別によって

苦しめられていた人々のために心を痛めたイエスの姿を描いています（九・三六）。まさにイエスは、神の御心そのものと言える存在でした。

ところが、この世の権力者たちは、暴力によってイエスを迫害したのです。多くの人は、その出来事を表すしるしとして十字架を思い起こすことでしょう。しかし福音書は、彼らがイエスを偽りの王と見なして侮辱したことも示しています。つまり茨の冠は、イエスが与えられた精神的な苦しみのしるしなのです（二七・二九）。

神の愛をも拒むこの世界には、“Thy Will Be Done”の祈りが必要であると言えましょう。そして私たちには、イエスが人々に示した神の愛の実現のために働くことが求められているのです。

商学部チャペルのバナーを見て、建学の精神である「マスタリー・フォー・サービス（奉仕のための練達）」の目標に心を留めて頂けたら幸いです。（報告者主任研究員木原桂二）